中山道ちょっと寄り道

訪ねてみたい各務原の史跡

各務原市歴史民俗資料館

新境川と百十郎桜

村国神社と村国座

山田寺塔心礎（無染寺）

中山道鵜沼宿町屋館

各務原市資料調査報告書第32号

おわびと訂正

以下のような誤植がありましたので、訂正します。

頁		誤	正
4頁	コラム（川上貞奴について）	明治7年	明治4年
5頁	コラム（福澤桃介について）	福澤桃介（1867～1938） 貞照寺は、日本女優の祖として有名な川上貞奴が建立した寺院として有名です。 貞奴は、生涯を通じて成田不尊を厚く信仰し、自らも幾多の害を不動尊の霊験により乗り越たといわれています。その晩年、光明媚な日本ラインのほとりを地と定め、約6千坪の用地に私を投じ自ら菩提寺となる貞照寺（金剛山桃光院貞照寺）を建立ました。…以下略	福澤桃介（1868～1938） 貞照寺は、日本女優の祖として有名な川上貞奴が建立した寺院として有名です。 貞奴は、生涯を通じて成田不尊を厚く信仰し、自らも幾多の障害を不動尊の霊験により乗り越えたといわれています。その晩年、風光明媚な日本ラインのほとりを聖地と定め、約6千坪の用地に私財を投じ自ら菩提寺となる貞照寺（金剛山桃光院貞照寺）を建立しました。…以下略
5頁	上段1～11行目		
6頁	所在地	（日本ライン鵜沼の森内）	（日本ラインうぬまの森内）
19頁	下段13行目	明治31年（1899）	明治31年（1898）
20頁	上段11行目	炉端遺跡	炉畑遺跡
24頁	上段2～3行目	明和5年（1765）	明和5年（1768）
29頁	上段1～2行目	明応年間（1492～1499）	明応年間（1492～1501）

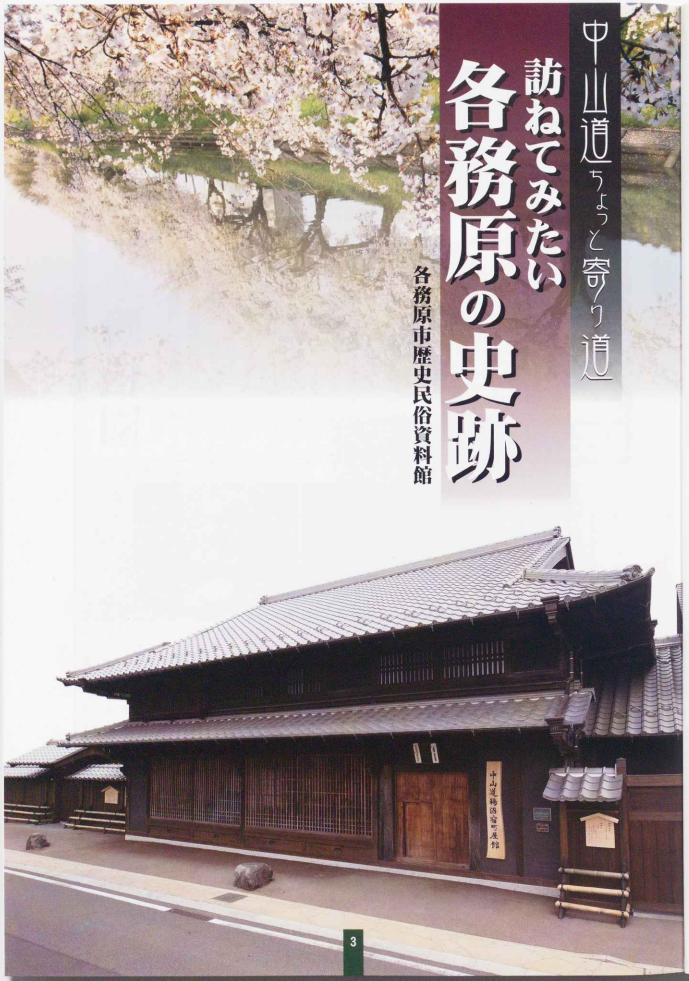
はじめに

東西に長い各務原市を横断して通過する中山道。この歴史街道を散策すること、歩き通すことを楽しんでいらっしゃる方々は想像以上に多く、今、歴史街道ウォークが静かなブームになっている感じさえします。

ひたすら街道を歩くのも楽しみ方のひとつでしょう。けれども、せっかく通りかかった道です。少し寄り道して歴史の足跡を探してみてはいかがでしょう。本書では、中山道沿い、もしくは中山道から少し外れたところにある各務原市内の史跡や文化財から、ぜひ訪れていただきたい30箇所を取り上げ、写真と平易な解説で紹介させていただきました。前回、発刊した『探してみよう歴史の足跡　中山道と鵜沼宿』とあわせてご利用いただき、各務原の歴史探訪をごゆっくりお楽しみください。

平成21年3月

各務原市歴史民俗資料館



目　次

◇ごあいさつ……1

◇目次・例言……2

1．晩松園……4
2．成田山貞照寺……5
3．うとう峠の一里塚……6
4．尾州領傍示石……7
5．中山道鵜沼宿町屋館……8
6．鵜沼宿脇本陣……9
7．金鯱塚古墳……10
8．二ノ宮神社……11
9．衣裳塚古墳……12
10．坊の塚古墳……12
11．石亀神社と石切場跡……13
12．丸一屋……14
13．茗荷屋……15
14．済北山大安寺……16
15．おがせ池……17
16．村国神社……18
17．村国座……18
18．普薬座……19
19．炉畑遺跡……20
20．旧桜井家住宅……21
21．山田寺跡……22
22．加佐美神社……23
23．加官山進禄寺……24
24．播隆上人碑（山の前・那加）……25
25．新境川……26
26．百十郎桜……26
27．手力雄神社……27
28．旗本徳山陣屋跡……27
29．日吉神社……28
30．龍慶山少林寺……29

◇市内マップ……30

◇参考文献・奥付……32

例　言

1．本書は、市内を横断する中山道沿いに点在する史跡等を紹介したものです。

1．記述にあたっては、なるべく平易な表現にするよう留意し、和暦については西暦を併記しました。

1．本書中に掲載した写真等においては、平成21年3月までの所在地にて撮影されたものです。今後の町並み整備事業等で所在地が移転する場合もありますのでご了承下さい。

1 旧川上貞奴別荘 晩松園

晩松園主屋

晩松園は、日本最初の女優として有名な川上貞奴が、自らの菩提寺として建立した貞照寺を参詣するため、昭和8年（1933）ころ、その門前に設けた別荘です。

門、主屋、茶室からなり、犬山城の北東、木曽川を眼下に見下ろす景勝の地に立地しています。鉄瓦で葺かれた屋根や、細部にまで貞奴のこだわりが感じられる内部装飾などが、ほぼ創建当初の姿で保存されており、貞奴の暮らしぶりを窺い知ることができます。

川上貞奴
（1871～1946）

明治7年、東京日本橋で両替商小山家に生まれ、貞と名づけられました。7歳のとき日本橋蓬町の芸者置屋「浜田屋」の養女となり、16歳にして「貞奴」の源氏名で芸者となりました。天賦の美貌に加え諸芸に優れた貞奴は、伊藤博文、西園寺公望など明治政府高官から贔屓を受けましたが、当時「オッペケペー節」で有名であった福澤桃介と第二部と結婚。アメリカ巡業には同行したのをきっかけに日本人女性として初めて公の舞台に立ちました。欧州巡業では「マダム貞奴」と呼ばれ、爆発的な人気を得、帰国後、女優第1号として国内の舞台にも立ちました。未亡人となってからは、かつて浅からぬ縁のあった福澤桃介の電力開発等の事業に協力。昭和21年、熱海の別荘で波乱万丈の人生を閉じました。

主屋は、玄関広間棟、仏間客間棟、田舎家棟、茶室浴室棟、台所女中部屋棟の5棟からなり、25以上の部屋が鶴翼状に配置・連結されています。

書院

天井の絵

茶室

茶室

明治17年（1884）に岐阜市中大桑町で建てられたものを、大正13年（1924）、貞奴の双葉御殿内（名古屋市）に移築。さらに、昭和10年（1935）に現在の位置に再移築されたことが分かっています。

門

銅板葺きの切妻屋根。創建当時は国道21号線に面して建てられていましたが、現在は敷地の北西部分に移築されています。

所在地　岐阜県各務原市鵜沼宝積寺町3丁目82－2
登録有形文化財（8件）

お問い合わせ

晩松園は、現在、民間企業の所有となっていますが、各務原市文化財課が窓口となって下記のとおり公開（要予約）されています。
見学日：毎週火曜日（第5火曜日と祝祭日は不可）　午前10時～（1時間程度）
申　込：各務原市文化財課まで　直通電話：058－383－1475
定　員：各日10名（申込順）　料　金：一人500円（資料代）

2 成田山貞照寺

宝物館（貞奴縁起館）

貞照寺本堂

貞照寺

貞照寺は、日本女優の祖とし有名な川上貞奴が建立した寺院して有名です。

貞奴は、生涯を通じて成田不尊を厚く信仰し、自らも幾多の害を不動尊の霊験により乗り越たといわれています。その晩年、光明媚な日本ラインのほとりを地と定め、約6千坪の用地に私を投じ自ら菩提寺となる貞照寺（金剛山桃光院貞照寺）を建立ました。本尊は、小川半次郎作の不動明王坐像。伽藍は、本堂・庫裏・書院・鐘楼堂・仁王門・稲荷堂・茶所・浄水舎・宝物館（貞奴縁起館）からなり、昭和8年（1933）10月28日、落慶入仏法要が盛大に行われました。貞奴の死後、寺の荒廃が懸念される中、昭和35年（1960）に成田山新勝寺（千葉県）の管理下に置かれ（のちに名古屋別院大聖寺に移管）、成田山貞照寺と改名しました。諸芸上達、芸能のお寺として、現在も全国から参拝客が訪れています。

霊験記彫刻

実現しなかった…
日本ライン大遊園地計画

福澤桃介（1867～1938）

大正期の実業家。福澤諭吉の猶養子であり、名古屋電灯、大阪送電、大同電力など多くの企業の経営に手腕を発揮して「電力王」と呼ばれました。

昭和2年、木曽川が「日本八景」に選定されると、福澤桃介は「日本ライン」の大規模な観光開発を目論みます。昭和3年7月5日の新聞『新愛知』は、「日頃信仰の観音像を奉安する寺院を建て新しい信仰地、新名所を作るべく計画されている、木曽川を横断して対岸に架空線を設けラインの清流を却下に跨いで美濃尾張を自由に往来する」という壮大なプロジェクトがあったことを伝えています。この計画は、桃介が病に伏したため実現されずに終わりますが、事業は縮小されながらも貞奴によって貞照寺・晩松園の建設というかたちで引き継がれました。昭和5年、対岸に桃太郎神社が移設されたのも、このプロジェクトの一環であったと思われます。貞奴の貞照寺、桃介の桃太郎神社が木曽川を挟んで向き合うとは、何ともロマンチックなお話です。

本堂胴羽目の霊験記彫刻

総檜造り本堂は、本山である成田山新勝寺のそれを模して、東向きに建てられています。この本堂の外壁には8枚の胴羽目彫刻があり、参拝者の目を引きます。彫刻は、貞奴が生涯を通じて不動尊から授かった数々の霊験を主題としたもので、良質な無垢の檜材から彫り出されています。躍動感と写実の繊細さの調和のから彫工の卓越した技量が伺えますが、それ以上に注目されるのは、貞奴の心情を受け止めそれを見事に表現し切った点でしょう。

所在地　岐阜県各務原市鵜沼宝積寺町5丁目189
登録有形文化財（8件）

お問い合わせ

成田山名古屋別院大聖寺　電話：0568－61－2583　宝物館（貞奴縁起館）入館料300円
成田山貞照寺　電話：058－384－0202

3 うとう峠の一里塚

所在地　岐阜県各務原市緑苑東2丁目16（日本ライン鵜沼の森内）

市指定文化財

うとう峠の一里塚（西塚）

一里塚とは、一里（約4㎞）おきに、街道の両側に設けられ、榎や松などの樹木が植えられた塚のことです。里程の目安や人馬賃支払いの目安となっていました。

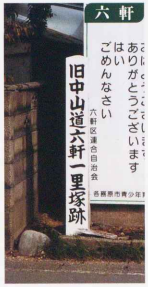
中山道が横切っている各務原市内には、4箇所に一里塚がありましたが、現在では「日本ラインうぬまの森」内にあるうとう峠の一里塚だけが唯一残っています。

西側の塚は高さ約2ｍ、直径約10ｍで、完全な形を残しています。東側の塚は、戦時中航空隊がバラック兵舎を建てたため、一部削り取られています。

江戸時代には松が植えられていたという記録があります。

市内の一里塚跡

六軒

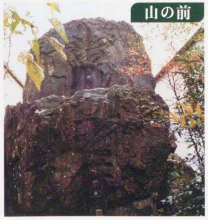


国道21号線を離れて約300ｍほどの所にありましたが、現在ではその跡を示す標柱が立てられているのみです。塚には松が植えられていました。

新加納

新加納立場の東側にありました。明治期以降の開墾で姿を消してしまいました。現在は標柱が立てられています。塚には榎が植えられていました。

山の前



各務山の前跨線橋の南側にありました。しかし、昭和20年（1945）の空襲でできた大穴を埋める為に取り壊されました。塚には松が植えられていました。

4 尾州領傍示石

所在地　岐阜県各務原市鵜沼東町1丁目

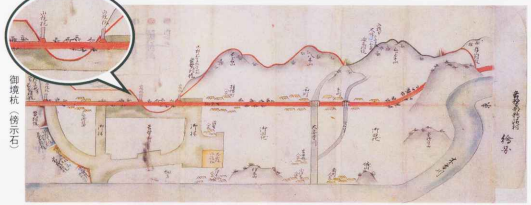
是より西尾州領

是より東尾州領

江戸時代の各務原は、天領（幕府領）や尾張藩領、旗本領などに分かれて治められていました。街道沿いには、それぞれの村境を示すための傍示石や傍示杭が立てられました。

その中で、鵜沼村（尾張藩領）と各務村（天領）の村境を示した傍示石が2基残っています。それぞれに「是より西尾州領」、「是より東尾州領」と刻まれ、現在の国道21号線おがせ信号付近とJR各務ヶ原駅付近に1基ずつ立っていました。

この2基は明治以降街道沿いから撤去され、その後鵜沼中学校の敷地内に建てられていましたが、現在は国道21号線坂祝バイパスと中山道が交わるところに移設されています。



各務郡鵜沼村絵図（桜井家文書）

鵜沼村と他領との境界を明らかにし、村域を再確認するために作成された村絵図と考えられます。中山道上で鵜沼村と各務村の境界にあたる部分に傍示石のようなものが描かれています。

5 中山道鵜沼宿町屋館

中山道鵜沼宿町屋館

中山道鵜沼宿町屋館（旧武藤家住宅）

江戸時代の宿場の面影を今に伝える中山道鵜沼宿のほぼ中央に位置した旧武藤家住宅は、平成18年（2006）に各務原市が建物の寄付を受け、修復工事を経て平成20年（2008）5月24日に「中山道鵜沼宿町屋館」としてオープンしました。

建物は、裏手の中庭を囲むようにして、主屋、東側の附属屋、西側の離れの三棟からなり、古い町屋（町中の商家）の特色をよく残していることから、三棟とも「登録有形文化財」「景観重要建造物」となっています。

武藤家の由緒

武藤家は、鵜沼宿本陣（坂井家）の東側に隣接していました。江戸時代は「絹屋」の屋号で旅籠（宿屋）を営んでいました。幕末の絵図に見られる「絹屋」は、「表間口6間、奥行11間、惣坪192坪半」で、渡り廊下でつながる二棟の家屋からなり、中庭・裏庭・湯殿2・土蔵2をもっていたことが分かっています。

明治維新を迎え、鉄道の普及とともに旅籠の経営が難しくなったようで、本家にあたる武藤嘉左衛門家（今の菊屋酒造）が営んでいた郵便局業務を引き継ぎ、明治中頃より鵜沼駅三等郵便局を経営するようになりました。建物は、明治24年（1891）の濃尾震災により倒壊してしまいましたが、その後再建し昭和39年（1964）まで郵便局を営みました。

旅籠を営んでいた頃の間取図

◇**主屋**

木造つし2階建て、平入り、入母屋造り桟瓦葺き屋根をもつ建物。明治24年（1891）の濃尾震災で倒壊し、明治後半に再建されたものです。大戸、格子戸、持ち送り、箱階段など建物のいたるところに古い町屋の特色を見ることができます。また、つし2階の美しい曲面天井も見どころのひとつです。

◇**附属屋**

木造つし2階建て、平入り、切妻造り桟瓦葺き屋根をもつ大正から昭和初期の建物。当時、養蚕小屋として使用されていました。現在は、来館者の休憩室・各務原市歴史民俗資料館の事務室として活用しています。

◇**離れ**

木造平屋建て、妻入り、切妻造り桟瓦葺き屋根の大正期の建物。昭和初期に太田宿から移築されたものと伝えられます。取り組は、式台玄関と水屋を備えた8畳2間で、床柱の木材から手前を「桑の間」、奥を「梅の間」と呼んでいます。

◇**槍と袖がらみ**

修復工事の際に主屋の梁根裏から発見されたものです。このほか短刀一振も発見されています。これらは宿場警護用具の武具と思われます。

所在地　岐阜県各務原市鵜沼町1丁目116－3
登録有形文化財（3件）

お問い合わせ

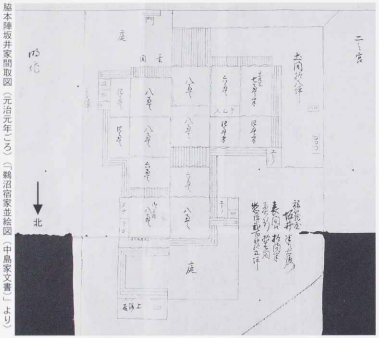
開館時間：午前9時～午後5時　休館日：月曜日（祝日は開館）、祝日の翌日、年末年始
入館料：無料　各務原市歴史民俗資料館　電話：058－379－5055

6 鵜沼宿脇本陣

脇本陣は、本陣の補助的な役割を果たした江戸時代の宿泊・休憩施設です。本陣に空きのないとき、大名やその家臣などが利用しましたが、平常は旅籠として営業していました。

鵜沼宿では、本陣の西隣にあった坂井家が脇本陣を務めていましたが、幕末になると、東町の野口家が務めるようになりました。坂井家は単なる旅籠屋として営業していました。

天保14年（1843）頃の脇本陣坂井家の建坪は75坪で、本陣（約174坪）ほど広くはありませんでしたが、門や玄関、上段の間をもっていました。


脇本陣坂井家間取図（元治元年ごろ）（『鵜沼宿家並絵図（中島家文書）』より）

脇本陣復元イメージ

現在、脇本陣は家並絵図に残る間取や各地の宿場町に残る脇本陣の建物等を参考に復元されています。

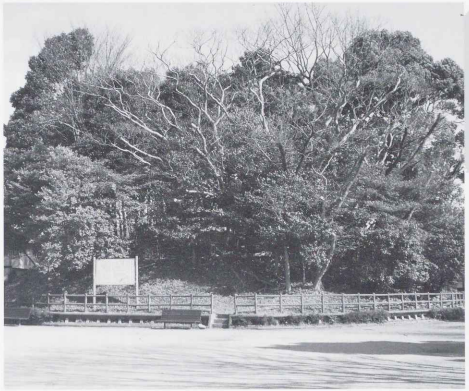
多くの町屋に見られるつし二階建、卯建のある造りになっています。

所在地　岐阜県各務原市鵜沼西町1丁目

芭蕉と鵜沼宿

「おくの細道」などで知られる松尾芭蕉（1644～1694）が貞享年間に3度鵜沼を訪れ、脇本陣坂井家に泊まったといわれています。貞享5年（1688）8月頃訪れた際に詠んだといわれる「ふぐ汁も喰へば喰せよきく乃酒」は、芭蕉自ら硅化木（木の化石）に彫ったといわれ、句と芭蕉の俳号の一つである「桃青」の字が刻まれています。

7 金縄塚古墳



所在地　岐阜県各務原市鵜沼東町3丁目133
市指定文化財

直径37m、高さ5.7mの古墳で、古墳時代中期のものとみられます。形状は円墳とも、前方後円墳であったともいわれますが、現在は墳丘の中央部が大きく削られています。江戸時代に発掘されたといわれ、遺物は伝わっていません。江戸時代後期に書かれた「濃陽志略」では、村人が塚を掘ったところ、これという出土品は無く、銅縄一束が発見されただけで、触れるとバラバラに砕けてしまったと記されています。また、銅縄の下には、一かたまりの朱砂があったということです。

金縄塚の伝説

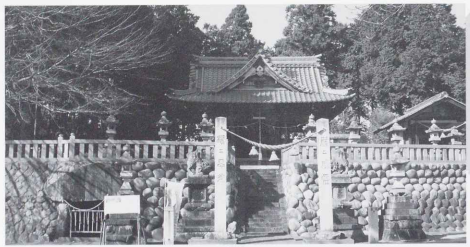
その昔、鵜沼村は川によって南北に分かれており、北側は土地が悪く貧乏だった。

ある日、川の北側に住む村一番の貧乏な男の夢に、白髪の老人が金色の鳥にまたがってあらわれ、「あの裏山で正月の日の出前に金色のチャボがトーテンコーと鳴く。その声を聞くときっと良いことがある。ただし、それは毎朝日の出前より働く、働き者にしか聞こえない。」と言って消えた。

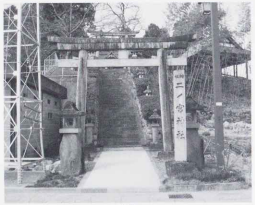
その話を聞いた村人たちは、朝早くから仕事に取り組むようになり、村人の暮らしも良くなった。人々は裏山を金鳥塚と呼ぶようになったが、これがなまって金縄塚という名で呼ばれるようになったということです。

また「濃陽志略」によれば、この塚からは夜毎鶏の鳴き声が聞こえたということですが、発掘で金縄が砕けたのち、鳴き声が聞こえなくなったということです。

8 二ノ宮神社



本殿



鳥居

鵜沼宿脇本陣の西側にある神社です。江戸時代のはじめに鵜沼宿が開設されるにあたってこの場所に移転してきたものだともいわれます。祭神は、坂道や村境を守るといわれる国狭槌命です。棟札には寛永6年（1629）や貞享4年（1687）のものが残っています。東側の拝殿は明治後期に建てられたものといわれ、農村舞台の特徴をよく示した建物です。

境内には、五穀や養蚕を司る保食大神の石碑や火伏せ信仰のある秋葉神社の祠もあります。また、渡り殿の左右にある石灯籠は明和2年（1765）の銘があり、境内の石造物の中で最も古いものです。この神社は、6～7世紀頃に作られたと考えられる古墳の上に建てられており、石室が露出しているため内部のつくりをうかがい知ることができます。副葬品等は見つかっていません。

石室

所在地　岐阜県各務原市鵜沼西町1丁目
登録有形文化財（拝殿）

拝殿

鵜沼古墳群

各務原市は岐阜県内でみても多くの古墳が見つかっている地域です。形態は円墳の他、前方後円墳も見られます。市内の古墳は各務原台地をとりかこむように分布しています。東端にあたる鵜沼地区にも大小多くの古墳が確認されており、古墳時代、有力な豪族がこの地域を支配していたのではないかと考えられます。

9 衣裳塚古墳

所在地　岐阜県各務原市鵜沼羽場町2丁目

県指定文化財

衣裳塚古墳（円墳）
直径：52m　高さ：7m

衣裳塚古墳

空安寺の東側にあります。県内に残る円墳の中では最大のものですが、前方後円墳の可能性もあります。内部の様子や出土した遺物については不明です。この古墳の名前について、坊の塚に葬られた人物の衣裳を埋めたとする言い伝えがあります。

10 坊の塚古墳

所在地　岐阜県各務原市鵜沼羽場町5丁目

県指定文化財

坊の塚古墳（前方後円墳）
全長：120m
（前方部）幅：66m
高さ：7.8m
（後円部）横幅：72m
高さ：10m

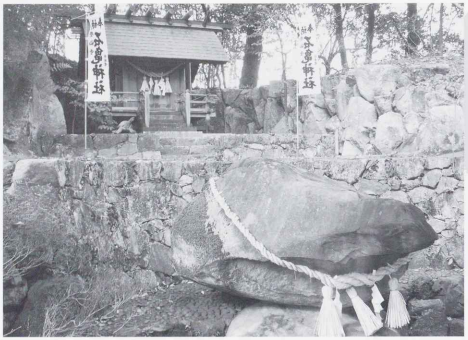
坊の塚古墳

衣裳塚古墳の南西、約300メートルにある前方後円墳で、県内で二番目に大きいものです。後円部の東側には、幅16メートル以上の堀の跡があります。

後円中央部に竪穴式石室があり、石室内から石製品や勾玉、臼玉などが出土しました。そのほか、埴輪や土師器が発見されています。

11 石亀神社と石切場跡

所在地　岐阜県各務原市鵜沼西町1丁目



石亀神社

八木山の信号交差点を北へ少し行ったところにあります。この神社の御神体である「石亀さん」は、もともと慶仙寺山のふもとの街道沿いにありましたが、昭和57年（1982）に現在の場所へ移されました。「石亀さん」は赤ん坊の夜泣きや母乳不足の折りによく参拝されたそうです。

石切場跡と鵜沼の石工

石亀神社がある場所の周辺は、かつて鵜沼石を産出する石切場でした。鵜沼石は緻密な砂岩で、加工が難しく手間がかかりますが、風化しにくいという特徴があり、墓石や石仏、石橋などに加工され、販売・造立されました。神社境内には石を切り出す際に出る割り屑や大きくえぐられた斜面を見ることができます。しかし、明治以降になると鉄道の普及により岡崎などで取れる加工しやすい石が広く流通するようになり、加工の難しい鵜沼石は次第に利用されなくなりました。

石切場跡

江戸時代、鵜沼石の加工・販売の中心となっていたのが和泉国（現在の大阪府）から移住した石工の縣氏でした。縣氏は明暦二年（1656）に鵜沼村へ来て石細工をはじめ、元禄の初めごろ犬山に石店を出し、後に犬山城御用を仰せ付けられました。

縣氏の作品は、蘇原にある進禄寺（24頁参照）の三尊像や、江南市にある曼陀羅寺の燈篭など、市内をはじめ周辺市町の社寺に残されています。

鵜沼には、昭和のはじめごろまでは5軒ほどの石屋があったということですが、現在はわずか1軒が残るのみとなっています。

12 丸一屋

所在地　岐阜県各務原市鵜沼西町1丁目
登録有形文化財（3件）

鵜沼宿内、西町の南側には江戸～明治期の街道の面影を残す貴重な建物が残っています。

このうち、一番東側にあたる住宅の母屋は、明治24年（1891）の濃尾震災後、明治27年（1894）に建てられた木造つし二階建て・寄棟造りです。門を入って正面には、切妻造りの破風をつけた式台玄関が設けられています。建物の東側にある路地には、水路が通っていました。

当家は脇本陣坂井家の分家にあたり、江戸時代には丸一屋という屋号で商売を営み、打刃物を扱っていました。その当時の看板が残っています。また、苗字帯刀を許され、宿年寄役や川並留木裁許人（木曽川の洪水で流出した御用材を検索する役目）などを務めた家です。内部の公開はしていません。

鵜沼宿の生業

中山道鵜沼宿家並絵図（年代未詳・桜井家文書）の中に現れる職種は次の通りです。

百姓屋　七二　大工　二　旅籠　八
商屋　三　神職　一　医師　一　髪結所　一

鵜沼宿は百姓屋の割合が大きい宿場でした。

また、天保14年（1843）に記された『中山道宿村大概帳』では旅籠屋を25軒（内　大8軒　中7軒　小10軒）とした上で、「農業之間旅籠屋ハ旅人の休泊を請、又ハ食物を商ふ茶店、其外諸商人有之」とあります。農業と兼業で旅籠屋を営んでいた様子がうかがえます。

13 茗荷屋

所在地　岐阜県各務原市鵜沼西町1丁目
登録有形文化財（4件）

明治24年（1891）の濃尾震災では、鵜沼宿内でも多くの建物が全・半壊という被害を受けました。その中で唯一倒壊を免れたのがこの住宅です。

建てられたのは江戸時代後期と伝えられ、文久3年（1863）に易者に見立ててもらったという絵図が当家に残っています。木造つし二階建て・切妻屋根で、二階には卯達（隣家との間の防火壁）があがっています。内部の公開はしていません。

茗荷屋は江戸時代旅籠屋を営んでおり、「御定宿　茗荷屋吉兵衛」と書かれた当時の看板や、「引札」と呼ばれるチラシが残っており、中山道鵜沼宿町屋館で見ることができます。

引札の口上

諸国御旦那様方御飛以き
以日増賑々敷御宿被仰付
りかたく奉存候付而者、
猶更御下嘱二伝馬駕等二而
も昼夜之差別無く仕立可申
候間此上とも御飛ひき之段
偏二奉希上候尤私方より宿
引出し不申候間若途中二而
私方相名乗御用宿
二而差支候趣申立外宿差図
いたし御案内可申林と申出
迎候共御名被下間敷候

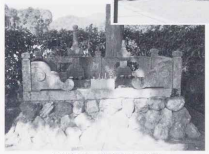
14

済北山 大安寺

所在地　岐阜県各務原市鵜沼大安寺町1丁目
県指定文化財（1件）　市指定文化財（1件）

大安寺本堂

応永年間（1394～1427）に笑堂常新を開山、美濃国守護土岐頼益を開基として創建された古刹です。臨済宗南禅寺派に属し、開山入寂後200年間は塔頭（境内にある末寺）が輪番で住職をつとめていました。土岐氏の衰退や戦国時代の兵火に見舞われ衰退しましたが、慶長元年（1596）に春叔玄陽が招かれてからは臨済宗妙心寺派の寺院として再興しました。江戸時代には、鵜沼宿の本陣に万が一の事があった場合の避難先として大安寺が当てられていました。明治維新の頃までは、寺有地に6つの塔頭がありましたが、廃仏思想が起きるとすべて大安寺一ヶ寺に併合されました。



土岐頼益・斎藤利永の墓

宝蔵庵塔心礎

宝蔵庵

宝蔵庵は大安寺開創前にこの辺りにあった天台宗の寺院で、揖斐郡谷汲村（現　揖斐郡揖斐川町）の横蔵寺の末寺であったといわれています。その塔心礎は現在大安寺境内にありますが、もとは今の場所から500mほど北東にあったということです。

大安寺とおがせ池にまつわる伝説

その昔、八木山は井戸も掘れない石山で、水の確保にも苦労していました。

ある時、大安寺のお坊様が八木山の山頂で座禅をしていると、一人の娘がやってきて仏の力にすがりたいと訴えてきました。ただならぬ気配を感じたお坊様が数珠を手に一喝すると、娘はたちまち大蛇の姿になりました。和尚は大蛇が負っていた怪我の手当をし、受戒をすると大蛇は池の方に帰っていきました。

しばらくして、お坊様が寺へ帰る途中、水の流れる音に気づき近づいてみると、今まで枯れていた谷の岩の間から水がわき出ています。これは先刻の大蛇のお礼だと喜び、竹のといを使って寺まで水をひいた、ということです。

15

おがせ池

所在地　岐阜県各務原市各務おがせ町7丁目

周囲4kmの農業用の溜め池です。伝説では奈良時代の宝亀年間（770～780）、一夜にしてこの辺りが陥没してできた池だといわれています。

池の中には八大竜王を祀る社殿があり、また池端には参拝所があります。この八大竜王は水神としてあがめられており、村が干ばつに見舞われた時には村民たちがおがせ池で祈祷を行ったり、たいまつを掲げて山に登り雨乞いをしました。

現在では7月下旬におがせ池祭りが行われています。夜になると提灯をたくさんともした船を浮かべたり、夜店や花火の打ち上げと、この時のおがせ池周辺は大変にぎわいます。

このほかおがせ池には、大蛇や竜にまつわる伝説がいくつも残されています。

おがせ池の伝説

むかし、おがせ池の底には大蛇が住み、ときどき村へ出てきては畑などを荒らし、人びとを困らせていました。

ある年の夏、日照りが続き、村の惣八郎という男が雨乞いのため、大事な牛と馬を大蛇に食わせようと池に連れてきたところ、牛馬もろともに池に飲み込まれてしまいました。

3年後、村人たちが惣八郎の三回忌をしているところに惣八郎が池から帰ってきました。彼は、池の底で苦しんでいる大蛇を助けると、大蛇から解脱へ導いて欲しいと頼まれ、太刀を受け取ったと話し、その太刀を村人に見せました。

その後、太刀は池の近くの祠に祀られたということです。

16 村国神社

市指定天然記念物（2件）

中山道から約1.5㎞ほど離れた各務地区に村国神社があります。この神社は飛鳥時代にこの周辺に勢力をもっていた豪族村国氏が、天之火明命と石凝姥命を祭神として創建しました。弘文元年（672）の際、村国男依は大海人皇子について活躍し、大海人皇子側が勝利すると功封120戸と「連」の姓を与えられ、重用されました。男依が亡くなると「外小紫（当時の官位26階中第6位に地方出身者である「外」がついた官位）」の位が与えられ、彼の跡を継いだ村国連嶋主がこの社に村国男依命として祀りました。

以後村国神社はこの地域一帯の氏神としてあがめられるとともに、戦乱の時代には先勝を祈願する神社として祀られました。

現在御旅所のムクノキと社叢（境内の森）が市指定天然記念物になっています。

17 村国座

所在地　岐阜県各務原市各務おが丘町3丁目

国指定　重要有形民俗文化財

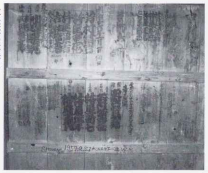
村国座

村国座は慶応2年（1866）に建設が計画されました。しかし、幕府の許可をもらうため江戸へ向かった庄屋長縄八左衛門が帰路の静岡で亡くなったことや当時の社会情勢もあり、舞台の完成は明治十年頃まで待たなくてはなりませんでした。村国座のこけら落としは明治15年（1882）に行われ、村人達が13日間にわたって歌舞伎を上演したといいます。

建物の概要と平成の大修理

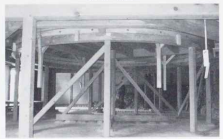
村国座は間口約17.6m・奥行約22.7mで、本格的な廻り舞台と奈落を持ち、広い花道や二層の桟敷を備えた舞台・客席一体型の建物です。今日まで大幅な改築・改造がなく、江戸時代末期から明治時代初期の劇場建築の典型を今に伝える数少ない農村舞台であるとして、昭和49年（1974）に「各務の舞台」という名称で国の重要有形民俗文化財に登録されました。

村国座は老朽化が目立つようになってきたため、平成18年度から20年度にかけて「平成の大修理」として、土台の据え直しや廻り舞台の復旧・耐震補強などが行われました。



大夫座の落書き

舞台・奈落



子供歌舞伎

村国座ができた当初は20歳までの「若連中」による芝居が行われていましたが、昭和31年（1956）からは現在のように子供たちが演じるようになり、「村国座子供歌舞伎保存会」も作られました。

近年では、子供の数が少なくなり、歌舞伎を演じる高学年のほか、低学年の子供も舞踊などで出演するようになりました。

芝居の様子

お問い合わせ

・各務原市文化財課まで　直通電話：058−383−1475　・料金：1人500円

18 皆楽座

所在地　岐阜県各務原市鵜沼羽場町1丁目

市指定文化財（1件）

皆楽座は、鵜沼羽場地内の中山道沿いにある津島神社の拝殿で、農村歌舞伎の舞台として利用されていました。皆楽座のある津島神社は棟札によると江戸時代には「牛頭天王社」と呼ばれていました。境内には享保3年（1718）の石灯籠があります。

皆楽座の創建時期は遅くとも明治16年頃には完成していたようですが、濃尾震災で倒壊した後、明治31年（1899）に古材を利用して再建されました。

廻り舞台や奈落を持っていますが客席は無く、本殿と向かい合うように建てられています。

舞台の様子

19 炉畑遺跡

所在地　岐阜県各務原市鵜沼三ツ池町6丁目
県指定史跡（1件）

各務原市内では、30箇所で縄文時代の遺跡が確認されていますが、このうち3箇所で住居跡が確認されています。

その一つ、炉端遺跡は今から約5千年前、縄文時代中期の集落遺跡で、遺跡名は、この辺りの字名「野中炉畑杉跡」から名付けられました。

炉畑遺跡の発掘調査は、昭和43年から46年までに5回、平成14年に1回行われています。

昭和の発掘では、10基の竪穴式住居跡や多くの縄文土器や石器が出土しました。

口縁部は東日本的な独自の渦巻文を持ち、胴部は西日本的な文様を持つ土器が見つかっています。各務原を中心とした木曽川中流域で多く発見された土器であることから炉畑（咲畑）式土器と呼ばれています。

このほか西日本や東日本で作られたものと同じ形式の土器が発見されていることから、他地域とも交流が行われていたと考えられます。

また、打製石斧や磨製石斧、魚を捕獲する網のおもりに用いたとみられる石錘や石鏃（石製の矢じり）、装身具などが見つかっています。

平成14年に行われた調査では、炉畑遺跡が谷に囲まれた集落であったことがわかり、堀立柱建物や屋外炉（共同炉）の跡、貯蔵穴群が発見されました。貯蔵穴からは炭化したドングリの実などが見つかっています。

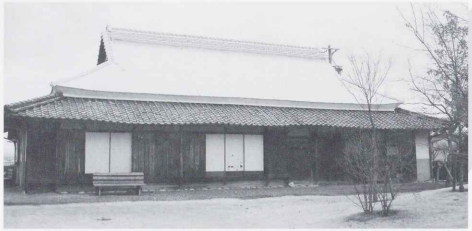
現在は、竪穴式住居六棟、堀立柱建物、共同炉が復元され、炉畑遺跡公園として整備されています。

これらの発掘で出土した遺物は、埋蔵文化財調査センター（中央図書館3階）に保存・公開されています。

お問い合わせ

炉畑遺跡出土品の常設展示をしています。
埋蔵文化財調査センター　電話：058−383−1123
場　所：埋蔵文化財調査センター展示収蔵庫（市民公園内中央図書館3階）
開館時間：10：00〜17：00　休館日：毎週月曜日・年末年始・祝日の翌日
入 場 料：無料

20 旧桜井家住宅



旧桜井家住宅

所在地　岐阜県各務原市鵜沼三ツ池町6丁目
市指定文化財（1件）

旧桜井家住宅は、明治4年（1871）に建てられた養蚕農家の住宅です。明治24年の濃尾震災で倒壊しましたが、古材を用いて明治32年（1899）に再建されました。昭和51年（1976）まで住宅として使われていましたが、同年9月、建物を市が譲り受け、隣接していた炉畑遺跡公園内の一画に移築・公開されました。

建物は、間口18.7m、奥行9.5mで元は蔓葺きでした。四八の間取り（8畳間が4つ）や、馬屋などがあり、この地域の裕福な自作農家住宅の建物です。現在では、昔の農具や生活道具などが展示され、見学することができます。

三ツ池と桜井家

内部の様子

旧桜井家住宅のあった三ツ池は、各務野と呼ばれる原野の中にありました。江戸時代前期に木曽路を通った学者、貝原益軒（1630〜1714）が記した「岐蘇路記」という書物には、

「…鵜沼の西のはずれより広き野あり　各務野という　広さ三里四方という　但し　東西三里ばかり南北一里半径に見ゆるこの野に田畑なし　唯青草のみ生ず　野の南に三井山という山あり　この山の南木曽川のきわまで野あり…」

と記されています。この原野は江戸時代を通じて開発が進められました。

鵜沼村では、享保6年（1721）頃から三ツ池周辺の本格的な開発が始まりました。享保11年（1726）に新たに開発が行われる際、庄屋代として入植者をとりまとめていたのが桜井九六（鵜沼宿本陣を勤めた桜井家の分家にあたる）です。

お問い合わせ

・各務原市歴史民俗資料館　電話：058−379−5055

21 山田寺跡と塔礎石

所在地　岐阜県各務原市蘇原寺島町地内
（塔心礎は無染寺境内に安置）
国指定重要文化財（1件）　県指定史跡（1件）

古代の山田寺跡

山田寺跡は、蘇原寺島町地内に所在する七世紀後半創建の古代寺院跡です。明治時代、寺院跡にあった竹藪を開墾したとき、塔心礎（塔の柱を置く礎石）が出土しました。さらに心礎中央の舎利孔からは、舎利容器（仏の遺骨を入れる容器）が発見されました。また、平成17年度からの3年間に行った発掘調査では、伽藍の境界を示す大小の溝跡や回廊跡、塔基壇の一部などが見つかり、古代の山田寺の範囲や規模を推定できるようになりました。

日本に仏教が公伝して百年ほど過ぎた七世紀半ば過ぎ。各地の重要な地域には、古墳の築造にかわって古代寺院が次々に建設されました。美濃地方にも知られているだけで33を数える古代寺院跡があります。そのうち5遺跡が各務原市蘇原地区に集中しています。古代の蘇原地区は、美濃における先進地のひとつであったことは間違いなく、有力な地方豪族の存在が浮かび上がってきます。

伽藍東側から多数出土した遺物

出土した遺物

古代の山田寺伽藍の位置と規模

古代の山田寺は、現在その塔心礎が安置されている無染寺のすぐ西隣にありました。伽藍は、南北辺とも約65～70mと推定され、ほぼ正方形に近い形状であったと考えられます。また、伽藍すぐ東側からは、仏具などとともに多数の古代瓦が発見されました。

古代山田寺の塔心礎

古代の山田寺は蘇我倉山田石川麻呂が創建したのか？

山田寺は、奈良県桜井市の「山田寺」と表記が同じことから、大化の改新の功臣蘇我倉山田石川麻呂が創建したとする伝承が残されています。確かに市内には飛鳥田神社・加佐美神社・宮塚古墳など、石川麻呂との関連の伝わる寺社や史跡も知られていますが、各務原と石川麻呂とのかかわりを実証する資料は残っていません。むしろ当時、この地で勢力をもっていた村国氏・各務氏などの地方豪族とのかかわりを想定すべきと思われます。

古代山田寺出土の舎利容器

塔心礎と舎利容器

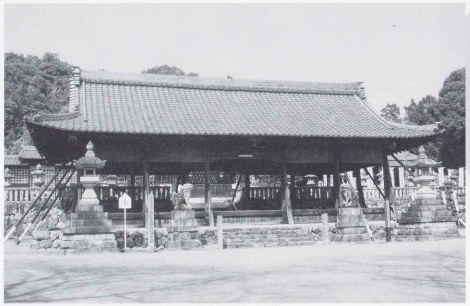
古代の山田寺の塔心礎は、径約1.5m、高さ約0.9mの硬質な砂岩製で、上面に直径約85cmの正円の柱座を施し、さらにその中央に直径約16cmの舎利孔を穿っています。現在は、慈雲山無染寺境内（各務原市蘇原寺島町2－18）に安置されています。

その舎利孔に納められていた舎利容器は、佐波理製（銅を主原料として錫・鉛・銀などを混ぜた合金）の蓋つき椀で、1300年以上の年月が過ぎた現在も美しい状態を保っています。また、その中に「金銭十文」が納められていたという伝承もありますが、真相や古銭の行方は定かではありません。

この塔心礎と舎利容器は、高い文化財価値が評価され、「山田寺塔心礎納置銅壺一合附塔心礎一箇」として国の重要文化財に指定されています。

お問い合わせ
各務原市埋蔵文化財調査センター　電話：058－384－1123
慈雲山無染寺　電話：058－382－6682

22 加佐美神社


加佐美神社　拝殿

所在地　岐阜県各務原市蘇原古市場町
市指定文化財（2件）　登録有形文化財（2件）

この神社は『延喜式』に登場する「加佐美神社」に比定されています。江戸時代には八幡宮と呼ばれていましたが、明治維新後に加佐美神社と呼ばれるようになりました。蘇原十か郷の総鎮守です。本殿は貞享4年（1687）、拝殿は延享3年（1746）に建てられたもので、登録有形文化財に登録されています。

祭神は加佐美大神・応神天皇・蘇我倉山田石川麻呂の三柱です。蘇我倉山田石川麻呂は大化改新の後に右大臣となった人物ですが、蘇原という地名はこの蘇我倉山田石川麻呂が治めていたことからくるものだという伝承があります。

加佐美神社には、10月の祭礼の際、みこしの渡御の前立ちをつとめる「おししさま」といわれる獅子頭があります。木彫り・漆塗りのもので、奉納箱には延宝3年（1675）の寄進銘が記されています。この獅子頭には次のような言い伝えがあります。

おししさま

ずっと昔、村を治めていた安積清右衛門という人がいました。ある日、各務野に立つ大きな松の木の上に獅子頭が乗っているのを見てどこかの神社へ安置しなければ、と思い立ち獅子頭を松からおろしていくつかの神社を回ってみましたが、安置しようとすると途端に重くなり、肩に止まって動かないようでした。

困った清右衛門さんは屋敷で獅子頭をもてなし、「おししさま」と呼ぶことにしました。しばらくして獅子頭が『私はかつてこの地を治め、今は加佐美八幡宮に祀られている方にお仕えしていたものである。この上は神にお仕えし、加佐美の社へ案内を願う』と言ったので、清右衛門さんはおししさまを加佐美神社へ案内したということです。

23 加官山進禄寺

「加官進禄」の文字をもつ吉語銭

加官山進禄寺

進禄寺の開基は、佐々木吉兵衛源親綱（川島吉兵衛）という人物です。吉兵衛は、明和5年（1765）7月、19町を焼いた岐阜の大火に遭遇しますが、「奇跡的に一命を取りとめました。この奇跡を、自家に伝わる善光寺如来の加護によるものと信じ、その仏尊を奉じて寺院の建立を発願しました。堂宇の建立に際しては、各務の旧山田寺の末寺で既に廃寺となっている吉祥寺を復興するという名目で、美濃郡代に願い出ました。普請の途中、境内用地より「加官進禄」の文字をもつ吉語銭が出土したため、これを吉祥として山号を「加官山」、寺号を「進禄寺」と定めました。はじめは天台宗に属しましたが、天明3年（1783）に臨済宗（妙心寺派）に改宗、さらに慶応3年（1867）には浄土真宗に改宗し現在に至っています。本尊は阿弥陀如来立像、境内には三聖神霊尊像、善光寺如来像など、鵜沼石工縣氏による石造物が多数あります。

吉兵衛新田の開発

現在の各務原市の大部分を占める各務原台地は、当時「かかみ野」と呼ばれる荒野でした。吉兵衛は、江戸時代後半の明和2年（1765）より6年の歳月をかけ、この不毛の荒地に6町4反の新田を開発しました。吉兵衛のこの功績は、蘇原吉新町（各務原市）の地名とともに現在も伝えられています。

三聖神霊尊像

進禄寺の奥院には、儒・神・仏を習合した石製三尊像があります。八卦を記す正発八形の基壇上に、「儒」「神」「仏」の文字を拝した三足を置き、さらに六十四卦と十二支を刻む円盤石を重ねて基礎とし、その上に三尊像を浮き彫りにした円形の主体部を据えています。三尊は中央に仏尊をやや高く置き、脇持として孔子と神尊を配しています。三教を習合する石造物は、全国的にも類稀です。石材は鵜沼石（鵜沼で産出する硬質の砂岩）で、石工は犬山御用石工の縣範石衛門（19頁参照）です。

所在地　岐阜県各務原市蘇原吉新町2丁目20

お問い合わせ

進禄寺　電話：058－382－7408

24 播隆上人碑（山の前・那加）

播隆上人について

播隆上人（1786～1840）は、江戸時代後期の念仏行者です。越中国（現在の富山県）に生まれ、各地で念仏修行を行ったのち槍ヶ岳の登山道を開いた僧として知られています。晩年には美濃を中心として仏法を広めてまわり、各地に名号碑や念仏講が作られました。播隆上人は、太田宿脇本陣で亡くなり、太田宿内にある祐泉寺横の社の境内にその墓碑があります。

各務原市内にも4箇所に名号碑が残されており、伊木山には上人が修行をしたといわれる場所もあります。

ここでは、各務原の中山道沿いで見られる名号碑2基をご紹介します。

山の前の名号碑

山の前の一里塚跡には、天保4年（1833）の銘が刻まれた播隆上人名号碑が立っています。（6頁写真参照）この石碑は濃尾震災の際に倒壊し、2つに折れてしまいましたが、有志で再建されました。しかし、第二次大戦中の爆撃によってさらに割れてしまったため、再び立て直されました。刻まれていた南無阿弥陀仏の六字名号は「南無」と「陀仏」の四字のみが残っています。

名号碑前の石仏

那加の名号碑

所在地　岐阜県各務原市鵜沼各務原町
岐阜県各務原市那加門前町

天保3年（1832）に建立されたものです。はじめは中山道の南側にあった小塚に立っていましたが、開墾のために取り除けられ、その後有志により現在の場所へ移されました。播隆上人は天保のはじめ、この辺りにあった松林の中に草庵を結び、村人たちに教えを広めたといわれ、上人がこの地を去ったのち、師の徳を慕う弟子たちによってこの碑が建てられました。

名号碑の側には、旅人の金品を奪う鬼夫婦が営んでいた「いろは屋」の伝説にちなんで、犠牲になった人々を供養する供養碑と、いろは茶屋で鬼夫婦に襲われそうになった旅の娘を助けというねずみ小僧伝説碑が立っています。

25 新境川

各務原市内を流れる川は川幅が狭く浅かったため、大雨が降るとすぐに堤防が決壊し人々を悩ませていました。中でも各務車洞を水源として羽島市内で長良川に注ぐ境川はひとたび堤防が切れると広い地域で水害をもたらしていました。

大正14年（1925）、境川と木曽川を結ぶ約5060mの放水路の建設が決まりました。2年の工期を経て昭和5年（1930）に完成しました。竣工式には余興として昼夜問わず花火が打ち上げられ、角力大会などが開かれたということです。これにより、境川の水害を防ぐことができるようになり、更木村・中屋村の排水不良も解決して農作業がしやすくなりました。

現在では新境川と呼ばれ、桜の名所として多くの人に親しまれています。

現在の新境川

26 百十郎桜

市川百十郎（1882～1969）

新境川放水路が完成して間もない頃、故郷の蘇原大島へ立ち寄った歌舞伎役者・市川百十郎は地元の人から工事の苦労話や、事故で犠牲になった人の話を聞き、新境川の完成を祝うとともに、工事の犠牲者の霊をなぐさめたいと思い立ち、堤防沿いに桜を植えたいと村人に申し出ました。

百十郎は昭和6年（1931）に1000本、翌年に200本の桜の苗木を寄附、住民と共に植樹しました。しかしこの時の桜は戦時中、防空壕の材料や薪用に乱伐され、終戦時には数十本を残すのみとなっていました。

昭和38年（1963）、市制発足とともに300本の苗木が植え直され、市制25周年にこの桜並木は「百十郎桜」と命名されました。

桜植樹記念碑と晩年の市川百十郎

27 手力雄神社

所在地　岐阜県各務原市那加手力町
県指定文化財（1件）
市指定文化財（6件）

手力雄神社

中山道から北へおよそ1km離れたところにあり、那加地区の総氏神として祀られている神社です。

天和3年（1683）に建立された拝殿に雌雄一対の竜の彫刻がありますが、この竜が夜毎抜け出しては村の畑を荒らして村人を困らせていたという、伝説も残されています。

永禄10年（1567）織田信長が岐阜城を攻める際ここに戦勝祈願し、勝利すると各務野の原野1300ヘクタール余を社領とし、多くの宝物を寄進したといわれています。境内には信長が弓術を試みたとされるところに弓掛桜と的場桜があります。現在は元の木の芽から育てたものが立っています。また、天正9年（1581）と刻まれた有製の狛犬一対（県重文）が伝わっています。

信長公弓掛桜

28 旗本徳山陣屋跡

所在地　岐阜県各務原市那加西市場3丁目

旗本徳山陣屋公園

各務原市北西部を治めていた徳山氏は、大野郡徳山郷（現在の揖斐郡揖斐川町）の出身で、織田信長や柴田勝家などに仕え、関ヶ原の戦いでは徳川方について戦功をあげると、出身地徳山郷と各務郡更木郷（現在の那加地区と蘇原西部）にあわせて五千石の領地を与えられ、旗本として幕府の重役を歴任しました。

徳山氏の陣屋は、更木郷の中心に位置する西市場に置かれ、「更木陣屋」と呼ばれました。

徳山氏の領内では、江戸時代後半に「徳山騒動」といわれる年貢の取り立てを巡った農民一揆が起こりました。当時農民が江戸に出て直訴する、ということは命がけでしたが、役人の処罰と訴え出た農民全員の無事帰村という結果に終わっています。

陣屋があった場所には、現在絵図や発掘調査を元にして「旗本徳山陣屋公園」が整備されています。

29 日吉神社

日吉神社

境内の狛蛙

所在地　岐阜県各務原市那加新加納町

滋賀県大津市にある日吉大社の分祀社です。

昔この神社の境内には池があり、そこに住み着いた蝦蛙と村人たちにまつわる伝承が伝わっています。初午の日には「蛙まつり」通称「げえろ祭り」が行われ、境内の池にまかれた餅を食べると無病息災でいられるとされ、泥だらけになって池の中を走り回ったということですが、昭和47年（1972）に池は埋め立てられました。現在のげえろ祭りは毎年4月の第一日曜日に行われています。

また、境内には昭和14年（1939）に建立された狛犬ならぬ狛蛙が神社を見守っています。

間の宿　新加納

日吉神社から西へ200mほど行くと、新加納の「里塚跡があります。この辺りは江戸時代、立場と呼ばれる休憩所が設けられていました。中山道の鵜沼宿から西隣の加納宿までは、四里十町（約17㎞）もの長丁場でした。そのため、鵜沼宿と加納宿の間の中山道には5つの立場（休憩所）が設けられ、両宿のほぼ中間にあった新加納もその一つでした。

新加納は、領主であった旗本坪内氏の接待所としても利用され、正式な宿場ではないものの「間の宿」として宿場につぐ賑わいを見せていたものと考えられます。

文久元年（1861）、皇女和宮が通行の際、新加納で小休憩を取っています。

現在では閑静な住宅地となっており、カギの手状に曲がった通りが当時の面影を残しています。

現在の新加納

30 龍慶山　少林寺

龍慶山　少林寺

所在地　岐阜県各務原市那加新加納町2104−1

県指定文化財（3件）　市指定文化財（4件）

少林寺は室町時代の明応年間（1492〜1499）に建立された臨済宗妙心寺派の寺院です。戦国時代に兵火で焼失しましたが、江戸時代に入り、領主となった旗本坪内氏が再興し、菩提寺として保護を受けました。

少林寺には坪内家にゆかりの寺宝が多く伝わっています。また、「雷神の手」といわれる寺宝が伝わっています。これは江戸時代のはじめ、新加納の東方で落雷があったときに石燈篭の下に落ちていた雷の手を当寺の和尚さまが拾って供養したところ、雷神がその徳に『和尚に縁があるところには雷の災害を除こう』と約束したといういわれがあります。

境内には神仏混淆の名残である稲荷堂があります。この稲荷堂は狐のお告げで建てられたという伝説があります。

稲荷堂

旗本坪内氏

新加納周辺を治めていた坪内氏の初代は、木曽川沿いに勢力を張っていた戦国時代の土豪で、蜂須賀小六らとともに川並衆の一人に数えられていました。

四代利定の時、関ヶ原の戦いで功名を上げ、恩賞として美濃国に6500石余の領地を与えられ、旗本として幕府の重役を歴任しました。その陣屋は少林寺のすぐ南にあったということですが現在ではその面影を確認することは出来ません。

旗本坪内家　墓所

訪ねてみたい 各務原の史跡マップ

参考文献

各務原市史
各務原の歴史
かかみ野の風土～産業と人物～
かかみ野の風土～年中行事と交通～
かかみがはら　ふるさとめぐり
鵜沼の歴史
鵜沼町百年史
蘇原の歴史
那加町史
各務村史
かかみがはらのむかし話
各務原の歴史散歩 ―鵜沼石工と石亀神社―
各務原市資料調査報告書
　第10号　各務原市の石造物
　第19号　各務原市の農村舞台
　第31号　中山道と鵜沼宿

各務原市資料調査報告書　第32号
中山道ちょっと寄り道
訪ねてみたい各務原の史跡
平成21年3月発行

編集　各務原市歴史民俗資料館
〒509-0132
岐阜県各務原市鵜沼西町1-116-3
TEL.058―379―5055
発行　各務原市
〒504-8555
岐阜県各務原市那加桜町1丁目69番地
TEL.058―383―1111(代)
印刷　山興印刷株式会社